

複合辞の通時的研究

——「ーからして」を中心に——

一 はじめに

本研究は、近代日本語法の一つである複合辞の初出とその変遷過程を究明しようとするものの一環であり、本稿では特に「ーからして」を中心に通時的観点に基づく分析・考察を通じて、当時の使用実態と変遷を明確にしたいと考えている。

周知のように、「からして」は、格助詞「から」と副助詞「して」が結合して「起点・終点・範囲」の意味を表す複合辞（注1）である。このような「ーからして」について『日本語文型辞典』には次のような記述がある。（注2）

【からして／をはじめ】

共に起点を示す表現であるが、性格がかなり異なる。「からして」は体言を受け、〃〃から後、〃〃からはじめて、〃〃といった時間的・空間的起点、さらには、〃〃をはじめとして、〃〃がまず、〃〃という現状認識における起点を表す。現状認識における起点とは、普通はまず問題にならない（そうあっては困

安 志 英

る）事物を起点として取り上げ、全体にわたってそう云えることを強調する用法であるが、逆に言えば、ある範囲の中から特に重要な事物を取り出して示す用法ということにもなる。全体として、「からして」の場合は起点のみを取り出す表現で、終点は全く意識されていないのが特徴である。語調を整えて強調する「して」によって文語的色彩を帯びているが、意味的には格助詞「から」と大差はない。

○ そんなことからして一人の女性との帰命な近づきが始まりましたので。

○ 「第一秋からして思ったよりか関心しなかったのサ……」
がきれいなんです。」

また、「からして」には、視点を表す「からする」「からいうと」「からみて」等と重なる用法もある。

a 外見からしてかなりの資産家らしい。

b 体罰は教育的見地からして望ましいものではない。

bは「からすると」等と同様にみならずことができるが、aには、

起点から全体にわたることを強調するニュアンスが残存しており、用法の連続性が感じられる。

なお、「からして」には、動詞の「見る」を受けて「見るからして」の形で、「見るからに」と同様の意を表す用法がある。これにも、起点の意識がはたらいっていると考えられよう。

「をはじめ」も時間的・空間的起点と現状認識の起点を示すが、しばしば「まで」と呼応して「〜をはじめ…まで」の形で起点から終点までの範囲を明確にする。終点が明示されていなくても、「〜をはじめみんな…」のような形で、その他のもの「」が常に認識されている点で、「からして」との置き換えを許さない理由となつている。そのため、現状認識の起点の用法では、代表的なものを挙げて、それを第一のものとして「取り上げるといふニュアンスとなる。

以上のように、現代日本語において「からして」は、起点と視点を示したり、理由を示したりす用法で使われている。このような「からして」に関する先行研究を検討してみると、「からして」がどのような変化の過程を経て、現在の用法として定着したかについての研究は現在見当たらず、辞書類に若干の記述しかされていないのである。

そこで本稿では、「一からして」の変遷過程を解明するためその全体像を見渡し、また同じような意味で使用された「一よりして」との比較考察を通して複合辞「からして」の変化の過程をまとめると。

二 複合辞「からして」の変化様相

二、一 複合辞「一からして」の初出

現在、「一からして」がいつから複合辞として使用されたかに関する通時的研究が全く進められていない状況で、「一からして」の初出として推定されるのは、『日本国語大辞典』に記述されている用例(1)と用例(2)である。

(1) 東周と云は考王弟からしての事ぞ

『史記抄 三・周本紀』

(2) 「美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き温良篤厚の士は必ず其地方一般の歓迎を受けられるに相違ない」

『坊っちゃん』

前述したように、格助詞「から」と「して」が結合した「からして」は、まず用例(1)のように「〜から後」「〜からはじめて」のような起点の意味で使用されている。以上のような意味用法は一四七七年成立と知られている「史記抄」で使われているのを見ると、おそらくそれ以前からこのような表現が使用されていた可能性が高い。また用例(2)のように接続助詞「から」と「して」が「〜故に」「〜から」と解釈できる用法は、「坊っちゃん」の成立時期である一九〇六年頃から使用されているものと推測される。したがって、本調査では、先行研究の検討を通じて得た例と古典テキスト(注3)を対象にして複合辞「からして」と「よりして」を抽出し、その様相を考察する。

二、二 本調査での複合辞「―からして」の様相

本調査では格助詞「から」と「して」が結合して起点の意味を表す用例が四例、接続助詞「から」と「して」が結合して理由を示す例が四例見えた。これを整理して表にすると、次の〈表1〉の通りである。

まず、起点を示す用例を見てみると、『日本国語大辞典』では、一四七七年頃の用例をその初出で見ることができ、これに次ぐもの一つとして、用例文(3)のように「狂言集」で確認することができた。「大名狂言」類の「粟田口」からの用例で、太郎冠者と、粟田口と名乗る人との会話の中にあらわれる。

(3) 太郎冠者「あれが頼うだお方のお声でおりやる。

粟田口「ハハア、お声からしてお大名さうにござる。」

『狂言集』76

太郎冠者が「それが主人の声です」と言うと、粟田口が太郎冠

表1 本調査における「からして」の抽出用例の様相

	作品	起点	理由
狂言集	粟田口	1	
浮世草子	野白内証鑑	1	
洒落本	甲駅新話	1	
	古契三娼		1
滑稽本	浮世床	1	
	東海道中膝栗毛		1
近世随想集	排蘆小船		2

者に「声から大名のように聞こえるね」と皮肉な口調で話をする場面で使われていた。

また、洒落本の一七一〇年成立の『野白内証鑑』でも、その用例を確認することができた。本調査では起点を示す用例はほとんど会話の中で使用されていたが、用例文(4)のように、地の文で状況を説明しているものも1例確認できた。

(4) 「はや酔のさめぬうち」と、客ことさらに床をいそぎ、

あふからして床の所作、万初心にはづかしさうにして見せ、
其の跡は啼いてきかせてよるこぼす、

『野白内証鑑』225

そして用例(4)と同様に、洒落本の「甲駅新話」でも起点を示す用例を確認することができ、やはり会話で使用されていた。

(5) 谷「第一、うぬが名からして気にいらねへ。蕎麦切へ入る

饅頭の粉じやアあるめへし、つなぎだのなんだのと、おし
の強へ。

『甲駅新話』74

また、用例(6)は、滑稽本の「浮世床」の会話で使われている用例であり、以上の用例を介して「からして」は、会話で主に使用された表現と判断される。

(6) 亀「コウ√剃刀を落とすめへせ。留はしかられねへ。ナア

留。アレ見や、親方からしてあれだものを」

熊「ヤヤ√能は√」

亀「こいつはすてきと美しい」

『浮世床』21

以上、起点の意味で使用されている「からして」の用例の特徴を調べてみた。用例は多くはないが、本調査で抽出された用例は

ほとんど会話で使われている特徴を示した。これは『日本国語大辞典』の「からして」の初出で記述されていた『史記抄』のジャンル的な特徴とも通じると見ることができ。つまり、当時の口語的表現が含まれている「史記抄」の用例を見てもわかるように、「―からして」は口語的特徴を維持しながら会話文で使用されたことが反映されているのではないかと考えられる。次に、理由を示す「―からして」を見てみることにする。起點の「からして」と同様に、抽出された用例は多くはないが、従来の先行研究では、一九〇八年の近代作品での用例が初出と推測されているが、本調査では用例（7）のように一七八七年頃からすでに使用されていることを確認することができた。

（7）およし「それでも湯治から帰た客人に聞したが、気色のい
▽処だとねへ」

お品「先高輪の茶屋からして、新かとおく、中かとおく、一
力、七チ力なぞと、他所にない家名がござりやす。

また、起點の意味を表す用例と同様に会話で二例が見られた。
『古契三娼』90
これが用例文（7）と用例文（8）である。

（8）弥次「おくのが此男のせうはいさ」

北八「それだから、質におく時の算用からしてか、らにや
アかはれやせぬ。此ぬのこはどふしても、巷メより外は貸
めへから、式朱ばかりにかはにヤア損がいく」

『東海道中膝栗毛』391

特記すべきものでは起點を示す用例の内、会話ではなく、地の
文から抽出された用例が1例あったが、理由を示す例でも、用例

文（9）と用例文（10）のように会話がない場合でも、使用され
ていることを確認できた。これは「―からして」は、さまざまな
文体の中で使用され始めたことを示す例と考えられる。

（9）故に善き歌を詠み出づれば、鬼神も感じ人もめづるからし
ては、善き歌詠まむと巧む心もやや出で来るよになりて、
奈良の歌の頃に至りては、よほど巧みになりて、その歌の
善悪をかれこれ言ふやうになれば、上手あり下手あり、こ
れを学び心懸く人あり。

『排蘆小船』365

（10）世の干よこの味を知らずして、正風のただ中なるべしと思
ひて、その体を願へども、さやうに教ゆる人の歌からして、
分に過ぎて飛びたること免れがたければ、その歌を手本に
する時は、いよいよそれを羨みて、世間の人分に過ぐるこ
となほは増さるべし。

『排蘆小船』389

以上、古典的な作品の中で使われている「からして」の様相を
調べた。抽出された用例は少なかったが、当時の使用実態を確認
することができたという点で、その意義がある。

本調査では「―からして」の抽出された用例が少ないというこ
とは、おそらく「からして」が、他の表現で代用されて使用され
ていたことを示唆すると思われる。では、「―からして」が成立
する以前には、どのような表現が使用されたのか。

周知のように助詞「から」が成立する以前は、「―より」が使
用された。それなら、「から」と「して」が結合した「―からし
て」と「より」と「して」が結合した「―よりして」は、どのよ

うな関連性を持って変化・発展してきたのか。

「一よりして」に関する研究を見ると、「一からして」と同様、これに関連する研究は皆無である。「日本国語大辞典」によると、「一よりして」の初出として推測される用例は西大寺本『金光明最勝王経』平安初期（八三〇年頃）点で使用されている用例（11）である。

（11）座從（ヨ）りして起ち

西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点

以降、用例（12）と用例（13）のように『更級日記』『春色梅美婦禰』など用例を確認することができるが、すべて起点を示す意味でのみ使用されている。

（12）東の山ぎはは、比叡の山よりして、稲荷などいふ山まであらはに見えわたり」

『更級日記』

（13）「寒梅の雪間に開く頃よりして、立春の日数を算（かぞ）へ」
人情本『春色梅美婦禰』

そこで、本研究では、「一からして」の定着過程の解明のために「一よりして」の用例も一緒に抽出してみた。これにより、「一からして」と「一よりして」がどのような相関関係を持ち、変化してきたのかを明らかにしたい。

表2を見れば分かるように、「一よりして」の場合、合計七九個の用例が抽出された。「一からして」と比較すると、江戸時代になるとその使用例が著しく減っていることが確認できる。「より」の成立には、さまざまな説があるが、「後」の意味を持つ「ゆり」が最も古い形で、ここから「ゆ」「より」「よ」が派生されて

平安時代以降、「より」が多く使われていたという事実（注4）を考えてみると、「より」と「して」の組み合わせが「から」と「して」の組み合わせより時期的に早かったことが分かる。

つまり、「一よりして」が「一からして」よりも早く定着して使われ始めており、それが原因となって「一からして」の発生が遅れたと推測される。しかし、一定の時期に使用優位を占めていた「一よりして」にも、その用法に変化が起き始めている。以下の用例を介して、その様相を見てみたい。

（15）乙「それならば有様を言うて聞かさう。有様は、そちの頼うだ者と例の一勝負したれば、某の仕合はせがようて金銀は申すに及ばず、汝までも打ち勝った。今日よりしては某が方の太郎冠者ぢやほどに、そう心得い。」

『狂言集』「繩絢」208

確認することができた。同様に狂言の作品で「一よりして」も抽出されたが、この「からして」と「よりして」がこの時期になると、同じ意味で一緒に使用されていたことが分かる。つまり、この頃になってから、以前優位を占めていた「よりして」がその勢力が減り、「からして」が徐々に多用化され始めたといえる。

また、「一よりして」の場合は、体言接続がほとんどだったが、用例（16）のように中世軍記物を中心に用言接続の用例が増加する変化も現れ始めていることが確認できた。

（16）重盛、池殿にこの由申されければ、涙を流したまひて、「あはれ、恋しき昔かな。忠盛の時ならば、これ程軽くは思はれ奉るまじ。過去に、頼朝に我が命を助けられてありけるやらん。聞くよりしていたはしく、不便に思ふなり。頼朝

表2 本調査における「―よりして」の抽出用例の様相

作品	用例数
うつほ物語	2
枕草子	1
和漢朗詠集	1
更級日記	4
浜松中納言物語	1
夜の寝覚	2
狭衣物語	1
栄花物語	5
大鏡	1
保元物語	1
平治物語	2
平家物語	6
とはずがたり	1
宇治拾遺物語	1
曾我物語	2
太平記	5
狂言集	2
義経記	3
室町物語草子集	4
仮名草子集	5
好色五人女	2
男色大鑑	3
日本永代蔵	1
雨月物語	2
春告鳥	1
東海道中膝栗毛	1
排蘆小船	4
しりうごと	2
近世説美少年録	1

斬られれば、我も生きて何かせん。干死にせん」とて、

『平治物語』545

先に提示した用例(3)で見たとように、本調査では、もう一つの特徴として、もともと「―よりして」が持つていなかった用法である「―からして」の理由を示す用法が、用例(17)のように「―よりして」でも使われていることを確認することができた。

(17)「堅意地なる年寄り心に、女郎を『水くさき物のやれ』(こ

はき物のやれ)と思ふ心よりして、かくまでは折檻するぞかし。何とそなたにも、女郎をとどこかぬ心あるものと思す」と問へば、

『仮名草子』「たきつけ草」369

以上の用例を見ると、「―からして」と「―よりして」がどのような相関関係を持ち、変化してきたのかを端的に示していることがわかる。つまり、「―からして」が定着するまで「―より

して」は、様々なジャンルの作品の中で使用されてきたが、室町以降「―からして」と「―よりして」が使用されるようになり、「―からして」の意味が分化・発展していったということである。したがって「―よりして」は、その意味用法が縮小していき、現代日本語ではほとんど使用されなくなったのである。

三 おわりに

これまで「起点・終点・範囲」の意味を表す複合辞「からして」を中心に、その変化の様相を考察してきた。本研究を通じて得られた結果をまとめると次の通りである。

一つ目、本調査では格助詞「から」と「して」が結合して起点の意味を表す用例4例と、接続助詞「から」と「して」が結合して理由を示す4用例を確認できた。

二つ目、「からして」のほとんどの用例は、会話で使用されており、これは「からして」が口頭語を中心に使用された表現であることを示唆する。

三つ目、理由を示す「からして」の場合、その初出を1906年の作品での用例と推測していたが、本調査を通じて1787年頃からすでに使用されていたことを確認することができた。

四つ目、本調査では、「からして」と「よりして」を比較して、様相を調べた。調査の結果、「からして」が定着するまで「よりして」は、様々なジャンルの作品の中で使用されていたが、室町以降「からして」と「よりして」が使用されるようになり、「からして」の意味が分化発展していったことを確認できた。また、「よりして」の場合には、このような変化の過程の中で、その意味用法が縮小されていき、結局は、現代日本語ではほとんど使用されなくなっていたことがわかった。

今後は本調査をもとにその範囲を広げ、「起点・終点・範囲」を示す複合辞「をはじめ」「にかけて」「を通じて」「にわたって」などを中心にその変化の過程に着目し、同様に意味との間での複合辞の変遷についてより具体的な研究を進めていきたい。

注

- (1) 松本正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語教育センター紀要』2、早稲田大学日本語研究教育センター、p.27-52から抜粋。複合辞というのは、いくつかの語が「ま」となりになって、その「ま」となりが固有の「付属語」(辞)的な意味を担うものとして用いられる形式を指す。

たとえば、「について」、「てほしい」などがこれに属し、「て」「ほしい」のような語が複合して「ま」となりとなり、固有の意味になった表現である。複合辞を提唱したのは永野賢(1983)で、現代語表現の分析のために、助詞・助動詞・接続詞といった、従来の文法単位を越えた辞的単位が必要だと説き、複合辞の認定を主張した。その後、松本(1990)は、永野の複合辞を継承・発展させ、複合辞を助詞・助動詞の用法に依って分類し、形式全体で一つの助詞と同様の働きをするものを助詞性複合辞(格助詞性複合辞、係助詞性複合辞、副助詞性複合辞、接続助詞性複合辞、並列助詞性複合辞、終助詞性複合辞)、形式全体で助動詞と同様の働きをするものを助動詞性複合辞に分けていた。今回の対象である「くからには」は助詞性複合辞である。

(2) 森田良行他(1989)『日本語文型辞典』アルク、pp.31-33。

- (3) [1] 竹取物語(9世紀末期頃) [2] 伊勢物語(平安中期) [3] 土佐日記(935) [4] 大和物語(951頃) [5] 宇津保物語(972?) [6] かげろふ日記(974) [7] 落窪物語(10世紀後半?) [8] 源氏物語(平安中期成立) [9] 枕草子(平安中期成立) [10] 紫式部日記(100頃) [11] 和泉式部日記(100頃) [12] 堤中納言物語(105) [13] 更級日記(109頃) [14] 大鏡(114?) [15] 今昔物語集(12世紀?) [16] 夜の寝覚(平安後期成立) [17] 狭衣物語(100?) [18] 栄花物語(108? - 110?) [19] 住吉物語(121頃) [20] 将門記(10世紀半ば) [21] 浜松中納言物語(平安後期) [22] とりかへばや物語(平安後期) [23] 方丈記(122) [24] 平家物語(12?) [25] 宇治拾遺物語(122頃) [26] 保元物語(138?) [27] 徒然草(139以降) [28] 平治物語(146以降) [29] 曾我物語(14世紀前半) [30] 無名草子(136~132頃) [31] とはずがたり(133?) [32] 十訓抄(鎌倉中期) [33] 沙石集(鎌倉中期) [34] 太平記(130頃) [35] 狂

言集(中世) [36] 謡曲集(中世) [37] 義経記(室町初期)
[38] 室町物語(中世) [39] 松浦宮物語(室町初期) [40] 仮
名草子(近世) [41] 浮世草子(近世) [42] 井原西鶴集(近
世) [43] 近松門左衛門集(近世) [44] 浄瑠璃集(近世) [45]
西山物語(1788) [46] 雨月物語(1776) [47] 春雨物語(1808) [48]
黄表紙(近世) [49] 洒落本(近世) [50] 滑稽本(近世) [51]
人情本(近世) [52] 東海道中膝栗毛(1810+1822) [53] 近世随想
集(近世)

(4) 山口明穂他(2001) 『日本語文法大辞典』 p. 832.

参考文献

- 田中章夫(1977) 「近代語における複合辞的表現の発達」 『国語学』 『国語史』, pp. 525-545.
松木正恵(1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」 『早稲田大学日本語教育センター紀要』 2、早稲田大学日本語研究教育センター、p. 27-52.
松村明(1970) 『古典語現代語助詞動詞詳説』 pp. 353 ~ 372.
森田良行他(1989) 『日本語文型辞典』アルク、pp. 31 ~ 33.
山口明穂他(2001) 『日本語文法大辞典』 p. 832.

(補注) この論文は、韓国の日本語学会誌に投稿した論文を加筆・修正したものである。

(あん じょん 群山大学校人文大学東アジア学部助教授)